



東洋美術学校

色彩検定を団体で受験し、優秀な成績を収めている学校にスポットを当てるこのコーナー。今回は2006年、2008年、2009年と3度も優秀団体賞を受賞されている東洋美術学校に大接近。クリエイティブ業界、美術業界で活躍する人材を過去1万人以上も輩出してきた専門学校だけに、色彩検定への取り組みもオリジナルで、本誌創刊以来、初めてのケースの紹介となりました。

ダンタイに大接近

学校で、職場で、仲間と一緒に色彩検定にチャレンジする

check

デザインやアートの世界に
手に職を持った即戦力を輩出

クリエイティブな感性を刺激する街、東京・新宿エリアにキャンパスを置く東洋美術学校（以下、東美）は、設立から64年にわたってデザインやアートの世界に有能な人材を輩出し続けています。「クリエイティブな仕事を志す人を育成する」、そして「実社会で活躍できるプロフェッショナルを育成する」という一貫したテーマのもと、技術と知識を身につけられる環境を用意するとともに、それが「手に職」へとつながるよう、就職指導にも力を注いでいます。専門学校には珍しい4年制の学科があったり、一流アーティストの聖地といわれる国立新美術館で専門学校では唯一卒業制作展を開催するなど、クリエイター養成校らしい独自のカラーを打ちだしています。

希望者全員が受講できるように
色彩検定講座は土曜日への開講

東美の色彩検定講座は、希望者が受講できる全学科共通の集中講座として開設されています。しかし、その運営スタイルは独特で、なんと「土曜日のみ」の開講なのです。これは、正科の中の色彩の学習とは一線を画して、本格的な検定対策を行うためであり、希望者全員を受け入れるため。これは当コーナー10年目にして初めてのケースです。

「3級対策講座」は午前9時から約3時間、「2級対策講座」は午後1時から約3時間の講義が行われます。さらに、2級・3級に合格した学生を対象に「1級対策講座」も開講しています。1級対策講座は専門学校ではほとんど耳にしたことがなく、しかも、1次の筆記試験だけでなく、2次の実技試験も含んだ完全対策講座になっているとのこと、まさに驚きです。

実際の色彩検定対策講座は色彩活用研究所サミュエルとの提携によって運営されています。受講者数は受験級により30名から90名（1級対策講座は約10名）。講義はいずれもティーチングアシスタントがつく2名講師体制で行われます。

色彩検定講座を取りまとめる柴野先生（デザイン研究室、主事）によると、「自分の作品をいかに論理的に説明し、相手に納得してもらうかという場面で、色彩検定で得た知識や理論は必ずプラスになります。学生もそのことを理解している、自ら希望して受講している、土曜は休みなのに……といった不満は聞かれないですね」とのこと。東美がこれまでに3度も優秀団体として表彰されていることに納得です（06年、08年、09年）。



検定合格がゴールではなく
学んだ知識をいかに作品づくりに
活かせるかを考えながら勉強



取材に訪れた日は、3級と1級の対策講座を拝見させていただきました。ここではよりハイレベルな1級対策講座の様子をご紹介します。1級対策講座の講師は、2000年の講座開設当初からずっと東美を担っている丹治先生。東美の全ての色彩検定講座をこまめに立派にしてくれたいと太鼓判を押す熱血講師です。

その丹治先生にまずは東美生の特徴を聞きました。「私は他にも大卒や短大、カルチャー講座などで指導していますが、東美の学生さんとはとにかくプロ志向！20歳前後でこれほど自分の将来像やビジョンがはっきり描けている人たちは珍しいのではないのでしょうか」。

デザインとアートの世界で通用する即戦力を育てる東美ならではの特色もあるといいます。「正科の授業で色彩の基礎については下地ができていますので、講義前半の導入部分がともスムーズに行えます。また、検定合格だけがゴールではなく、実際の仕事でいかに学んだ知識を活かすことができるかを考えながら勉強している、暗記だけがちな分野も自分なりに消化しながら学ぼうという姿勢を感じます。知りたい、学びたいという動機そのものが純粋で、それが合格への原動力になっているのだと感じます」。また、理論と現実の結びつけが容易で教えやすい面もあるのだとか。「この色彩理論は実際にこんな風に活用されていますよ」といって、流行の服とかアニメとかメディアで話題のポスターとかをあげても、あくアレねって感じですぐに理解してもらえます」。

実は1級対策講座は今期からのスタートで、その発端はやはり学生からの強い要望だったそうです。「学生の熱意で講座が開講されるってスゴイことだし、こちらも燃えますよね。夏休みにも集中講座を3日間やったのですが、毎日6時間きっちり勉強してくれました。1年目から手応えアリです」。

学生との何気ないやりとりにも
効果的な勉強法のアドバイスが

実際の講義をちょっとだけ再現してみます。当日は染織や繊維について覚えることが中心の講義で、服飾史の中で歴史的な柄を説明する場面でした。

先生 「〇〇君、そのTシャツ来週も着て来てって言ったのに着てないね」

学生 「あ、忘れてました」

先生 「残念だなあ。あれは個人的にあの服が気に入ったからとかじゃなくて、今日グレンチェックの柄を勉強するから、ちょうど実物が見られていいと思ったのよ」

学生の声

voice

「1年生で3級に、2年生の夏期検定で2級に合格したので思い切って1級にもと思い、1級対策講座に申し込みました。将来はグラフィックデザイナーになりたいと思い、デザイン事務所でアルバイトもしています。最近、雑誌の表紙デザインをやってみないかと言われて、3案ほどプレゼンテーションをしたところ、とても好評でした。そのときに気をつけたのは「色をやたら使い過ぎないこと」「使う色は初めに何色か決めること」「後はその組み合わせで勝負すること」。直感の部分もありましたが、なぜこの配色やレイアウトにしたのかが論理的に説明できる自信があったのでデザインも迷うことなくできました。1級に合格したらもっと自信をもってプレゼンテーションできそうな感じがしています」

- 「色彩検定講座で学んだ配色の方法を反映して作品をつくっています」
- 「色を見分ける力がつき、作品づくりでも視認性を気にするようになりました」
- 「自分が元々持っている色彩感がグッと広がったような気がします。今後、〇〇っぽいデザインが、自分のイメージだけでなく、きちんと知識に基づいてできるようになったらいいなと思っています」
- 「日常の中にある色彩にもそれぞれ意図があるのがわかって面白いです」

このように何気ないやりとりにも、暗記を楽しく色感と結びつけて学ばせる工夫があり、さりげないながら入念な下準備が感じられる瞬間でした。時にはニックネームで学生を呼ぶなど、質問がしやすい関係を築きながらも、講師としてきちんと学生を引っ張っているよう節度ある対応も心がけているようで、なるほど教室全体にほどよい緊張感が満ちているのが印象的でした。

